

# Intellectual Journey in Marius the Epicurean

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-04-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Hasegawa, Mitsuaki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.24517/00005256">https://doi.org/10.24517/00005256</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



## Marius the Epicurean 試論\*

長谷川 光 昭

### はじめに

1883年の書簡で、Walter Pater は、一つの創作肖像を書いていると述べ「近代精神に可能な宗教相があり、その状況を伝える事が私の企図の主要な目的である」と言う<sup>(1)</sup>。Benson は、これを受けて Marius の動機は「深い宗教癖の高い知性人の、種々の哲学の段階を経て基督教の入口に達する歴史の軌跡<sup>(2)</sup>」とし、「高貴な落伍者の履歴<sup>(3)</sup>」とまとめる。彼の論を踏まえ T. S. Eliot は Pater が基督教信仰を知らず「彼、もしくはマリウスは、ギリシャ形而上学をキリストの伝統と融合させんとした当時の知的活動に無関係に動き」「マリウスは唯基督教会の方へ漂行しており」「Aurelius の瞑想と福音書との間隙を了解せず」と述べこの作は「教養知識人による啓示宗教の拒絶が、美術への更新された関心と一致する英国史の一点を示す」ものとして<sup>(4)</sup>、批判と文化史的意義を認めている。

Ward は、マリウスが象徴的風景の移行を通して純粹に知的な旅路をたどるとし「この本の何物もマリウスの感情の状態を説明するかぎりでしか意義がない<sup>(5)</sup>」との立場から、この物語の筋を象徴性の点から解説し「彼は殉教者達の如く大恩寵を期待する<sup>(6)</sup>」と結んで、基督教に帰順したとも殉教者となったとも断定していない。これに対して、Monsman は、プシュケのキュービッド探索へと関連づけ<sup>(7)</sup>、ディオニソスとアポロの二つの神話的原理の交錯を分析し、「マリウスは他の基督教徒と共に、人間経験の洞窟の外の偉大な光を確かに認識し、光と愛の神との最終的霊交を期待して死ぬ<sup>(8)</sup>」と結論づけている。

本稿は、マリウスの精神遍歴を確認しながら彼の成長の過程と、エピキュリアン的姿勢を整理し、最終的には基督教への傾斜を示しながらも宗教的遍歴と、郷愁と憐憫という異教的人間感情から、感情的にはエピキュリアンのまゝ死んで行くとの態度を示すものである。

### Part I (1) Cupid と Psyche の物語の意義

アプレイウスの『黄金の書』の中からの、Cupid と Psyche の翻訳（第五章）に関して、Benson は、長過ぎる挿話として、作品全体の欠点と指摘している<sup>(9)</sup>。一方 Ward は、手法としての不満を述べながらも、「現在への不満感」と「完全なものの隠蔽性」を表わす引き延ばされた寓意物語としての意味を認め、マリウスの理想家肌を示すものと解釈している<sup>(10)</sup>。Monsman は、これを Benson 流の脇筋とはとらえず、積極的にマリウスの精神発達史との関連性を認め、「愛の神へのマリウスの探究」を示すものとしキリスト教化された「愛の神の力によって死の腕から解放された人間の魂の寓意物語」と解釈し、キリストとプシュケの等価性と、個人及び教会の花婿としてのキリストの心象を指摘する一方、Semele と Zeus の聖婚への連想から、Semele を豊穡と生命の女神の Demeter を表わすものとし、彼女の状況を「不滅界への回想の成就」を求めるプシュケとマリウスの状況と照応するものと敷衍し、更にキリスト教寓話への統合として Marius を Mary の男性形と臆測し、Marius も Mary も至高の愛人 (the supreme Lover) を探究していると解説している。要するにこの物語は「マリウス自身の人間的状況と、死の運命の狭い牢獄への

幽閉と、不滅の愛の市の夢に<sup>まち</sup>応ずるあるもつと大きな世界を見つけようとする要求」を表わす寓意物語であると結論づけている<sup>(11)</sup>。

Ward の場合、この「想像的愛」とキリスト教への回心との連結に多少の抵抗があるが、Monsman は、神話的パタンへの拘泥からの創作過程への臆測が過度にみえるものの、精神発達の巡礼性に首肯性が強い。しかし Pater 自身の意図以上の趣味的耽溺の評は免れ得ないところであるが、寓話的性格をキリスト教回心とのみ関連させるのみならず、更に異教的植物祭神話からの展開としての意義づけも必要であろう。というのは、第1章で幼年期のマリウスが少年司祭となる Ambarvalia の祭祀は、もはやその意味は理解されぬ時代とはなっていたが原始農耕社会における豊饒植物神 Ceres (Demeter), Bacchus (Dionysus), Dea Dia に捧げられるものであり、Monsman はディオニソスの死が祭祀の中核となっているといっており<sup>(12)</sup>、これは言わば神の生から死、更に死から再生という儀式（原始農耕社会に広く類型のみられるものだが）を自然の運行（四季）と連関させた Persephone 伝説の一であるからである。また第6章の三月の祭は Isis の舟に関するものであるが、司祭達の捧げ持つ Isis の象徴たる穀物製扇、黄金の蛇、象牙の公正の手及び祈禱船などは、この神のエジプト起源と植物神としての役目を表象しており、行事として海に舟がおき去りにされることは、神の死を象徴する余波とみれる。そのように考えれば、両方の儀式の参加者及び観察者としてのマリウスは、生涯の精神的軌跡をこれらの神の生—死—復活のパターンに倣うものとみなされ、両章の中間に位置する Psyche の話も同一パタンの生—死—復活を示していることを考えれば、同一主題の変奏と考えることができるのである。つまり、Cupid と Psyche の物語は、単なる作者の翻訳演習でも性癖の偏重でもなくて、繰返ししの寓話としての主題の確認としての意義は果しており、それが作者の中心的人間解釈でもあり、人

類史解釈とも考えられる。(たゞし文学的效果および人間代表としての Marius の寓話性との連関的效果は別の問題である。)

## (2) 心象風景に伴う感覚と知覚の形成

Psyche の愛への過程を Marius に適応させ得るとすれば、出発点は幼少年期であり第1章ヌマの宗教、第2章白夜邸、第3章転地で扱われるが、ペイターの設定する場面は作者自身の心象風景で象徴的意義が付与されている。

「ヌマの宗教」を結ぶ嵐の朝の場面は、マリウスに生涯を通じて回る二つの重要な感覚と認識を育くんだ象徴的場面である。祭りの翌朝の眠りを醒ます雷鳴が彼の孤独感を痛切なものとする時、儀式が保証してくれる神々との協定による加護を思いつつ寝床の中にいるのである。

His own nearer household gods were all around his bed. The spell of his religion as a part of the very essence of home, its intimacy, its dignity and security, was forcible at that moment; only, it seemed to involve certain heavy demands upon him.

そこで彼に培養されていたのは、①人間の外に在る力への宗教的責務感及び②死者を含む守護神との共生する家ないしは家族の意識である。つまり宗教的慣行及び伝統の遵守にもとづく歴史、生、生の事件、家族同和の境遇、労働のもたらす賜物などの神聖視と、その賜物を受容する宗教的責務感及びわずかの供物を喜び、無視されて歎き悲しみ生前の住家に常住する死者達の霊への奉仕に伺われる家の感覚を抱くマリウスがそこに居り未だ感性と知性の分離されぬ幼年が出発点に立っているのである。そこには宗教と家の感覚の未分化な融和が認められるといつてよいであろう。

「白夜邸」にあってはこのような感覚を育くんだ原因としての具体的環境及び人物を解説していると考えらるべきである。Ward は白夜邸から眺望できる、カララの懸崖の雪の吹き溜りのような白さ、遠くの港から積出される大理石の

白さ、多分大理石作りらしい灯台寺院、白く砕ける波の曲線、および母親の白い顔と手足、彼女の紡ぐ白い布等にみられる白さを、ペイター自身の言葉を借りて「不断の夢想」を象徴するものとし「この家の位置の隠遁静穏性」と母親がその権化であることを主張しているが<sup>(13)</sup>、ペイターの言う夢想はむしろ現実からの背反とするより現実の投影された非現実が現実と混和して、感性と知性が未分化の状態と修正すべきもののように思われる。そうすれば第2章の解説性が意味をもち、第1章のマリウスの精神的構造の原因が了解されるのではなからうか。

マリウスの宗教感と家の意識の育成は母親の聖堂としての家の存在を基礎としている。

Something pensive, spell-bound, and but half real, something cloistral or monastic, as we should say, united to this exquisite order, made the whole place seem to Marius, as it were, *sacellum*, the peculiar sanctuary, of his mother, who, still in real widowhood, provided the deceased Marius the elder with that secondary sort of life which we can give to the dead, in our intensely realised memory of them—the “subjective immortality”, to use a modern phrase, for which many a Roman epitaph cries out plaintively to widow or sister or daughter, still in the land of the living.

母親の死後の夫への殉奉的寡婦生活が、所謂死者との常住ともいふべき「主観上の不死性」を中葉非現実的に承認させ、家を聖堂と一体化し尼僧的雰囲気的生活から、幼いマリウスの感覚即ち生者の外側に住む者への責務と死者との共生に基礎をおく家の観念が培養されていたのである。そしてそのような心性が、犠性を含めての動物一般への共感と憐憫の情を親和的に育成し、これらの感性は生涯を通じて消滅することなく回想的に折にふれて吐露されることになり、いわば彼の *tabura rasa* に沈着した基影となっている。従って母親が論して語る魂の比喩

もまたマリウス自身の心性への懸念と解される。「お前が胸に抱いて人混みの中をつれていかねばならぬ白い小鳥—お前の魂はそんなものです。向こう側の良い御霊の手に、わずらわされもせず穢されもしないで行けるかしら？」という時感覚的に把握される *tabura rasa* の価値（つまり白さの象徴性としての純潔性と静穏性）と、生涯に通じる旅路への危惧を表わすのであり、（これがペイター自身の自作への問いかけでもあろう）ここに家の持つもう一つの意義としての「母性愛」という「すべての愛の中核タイプ」が暗示されている。すべての註者が指摘するマリウス（そして彼を代弁者とするペイター自身）の「郷愁」という感覚は、このような母性愛と死者との共存という家の観念を基底としているのであり、人生の旅（*Psyche* の生に応じる）にありながらつねに回帰を繰り返すことになる。

更に「体質的な悪への漠然とした恐怖」が家を安全の場とする感性の補強となっている。イタリアの古い宗教が陰うつな底流と悲哀の心象に富むため彼にとって良心とは「怒れる神々の前での告発者」となる故に、悪を回避する志向が生じたのであり、この悪の象徴として、初夏の蛇の生殖の心象が刻印されるのである。しかし蛇はペイター自身も「古い庭の神」と書いているように一種の古い地神である筈だから、マリウスに悪の権化として定着させたのは、ペイター自身のキリスト教的神話（アダムとイヴの物語）への無意識の加担と、*Psyche* の物語の蛇体への危惧が創作に反映したといふべきであろう。そしてマリウスは、嫌悪感と共に憐憫が混在する点を認めながら、自身の感覚を「超自然的なものへの恐怖」と「道徳感」だといっていることは、先述した宗教感覚との連関をとどめており、その原因として蛇のもつ人間的容貌を挙げることも人間の邪性への無意識の開眼があり、この事象の重要性を確認する。

There was a humanity, dusty and sordid and as if far gone in corruption, in the

sluggish coil, as it awoke suddenly into one metallic spring of pure enmity against him.

この場合「斑点のある薄暗い裸」という視覚的反応を基底としており、美醜への反応が後のマリウスのエピクロス主義の萌芽をみせている。

「白夜邸」での幼年期の知的傾向は、理想家的性癖で瞑想的傾向と要約されているが、これがマリウスの将来のエピキュリアンの価値評価に至る出発点を形成したようである。

A vein of subjective philosophy, with the individual for its standard of all things, there would be always in his intellectual scheme of the world and of conduct, with a certain incapacity wholly to accept other men's valuations.

要するに自己を価値評価の基準とする主体思考様式が、孤独の感覚のうちに誕生しつつあったといえるのである。

「転地」の章は、マリウスの知的将来への方向づけという点で意義を持っている。当時の健康崇拜の宗教として医術と信仰を兼務する「アエスキュラピウス僧団」がキリスト教団に最も近いものとしている点、またアエスキュラピウスの物語の浮彫り中で彼の息子達の夢に変身する図の解説で、彫像にみられる「特異な、自己抑制と陽性の宗教的熱誠との融和」に注目した点、及び諸僧にみられる同じ様相を記録する点などから、マリウスに与えるペイターのキリスト教的偏向が暗示されているが、顕示されているのはエピクロス主義の原理の最初の教授である。

少年の熱病の治癒のためにこの寺院を訪れたマリウスは、アエスキュラピウスが蛇体でローマにきたこと、神が蛇体で顕れるかもしれぬ怖れ、この地に蛇が飼われているという噂などにおびえ、恐らくその夢にうなされた時現われた若い僧が知的教訓を授けてくれるのである。生活の規定影響力が視覚にあるから目の能力を増進することに勤勉であれとさとすのだが、これ

はプラトンの *Phaedrus* 中の理論と同じことをマリウスは後に知ることになる。「目に見える目前の美しいものが人によって、流れのごとく周囲の大気に広がり、特異な性格の者には強力な物質のエッセンスの様働きかけ、見る者を巧みな肉体的必要によるかの如く順化させてしまう或種の感化力に、人間精神が敏感である」という理論で美を愛することにより生の完成を認めるものである。そしてこの原理に基づく生活の次のような処方箋が提示される。

- ① 個人的敏捷性と清潔性により視覚を明澄にしておくこと。
- ② どこまでも潔癖に、極上の形と色を、それ以下のものと区別すること。
- ③ 美しい物、特に青春期と関係ある物を深く瞑想すること。
- ④ 美しい物の世界の典型として、たゞ一つの美しいどんな物でも自分の傍に置くこと。
- ⑤ 目に不快なものは、いつも用心深く避けること。
- ⑥ そんな物との連繋の懸念があれば、どんな犠牲を払っても絶縁すること。

美への傾倒を生活原理とする唯美主義への入門が行われ、感性と知性の未分化の状態から、知的傾向の強い基礎が敷かれたのである。転地によってもたらされた健康の上に新しい眺望が象徴的に寺院の思いもかけぬ窓から開けてくる。これをペイターは「新世界のヴィジョン」と意味づけている。それは「異様に楽しい趣きの長く続く谷間」である。

In a green meadow at the foot of the steep olive-clad rocks below, the novices were taking their exercise. The softly sloping sides of the vale lay alike in full sunlight; and its distant opening was closed by a beautifully formed mountain, from which the last wreaths of morning mist were rising under the heat. It might have seemed the very presentment of a land of hope, its hollows brimful of a shadow of

blue flowers; and lo! on the one level space of the horizon, in a long dark line, were towers and a dome : and that was Pisa. —Or Rome, was it? asked Marius, ready to believe the utmost, in his excitement.

この風景をWardは「完全の心象」と解している<sup>(14)</sup>が、完全・完璧・完成などの観念に伴う到着感はなく、むしろ「希望の地の表象」という暗示に見られる将来の期待感を象徴する風景と考えるべきであろう。従って地平線の彼方に列ぶ多くの塔と一つのドームは、先の生活原理の具現する世界の姿の予徴であって、次の章の舞台がピサであることの伏線となっている。この風景で、緑の牧場やオリーブは青春の美を、見習僧はその中の生活に未経験なマリウスの影を、溢れる日の光は美しい陽性の生活の燃焼を、遙かな山は美の典型を、表徴していることも唯美主義の実現であって、ペイター自身の心象風景といえよう。この章での母の死は、幼年期の終了と新しい生活原理への導入を画する象徴的事件となっているのである。

### (3) Flavianとgolden alchemy

ピサの学校での学友 Flavian が、先の生活原理を具現する人物として意図されていることは、「衣服や美食や花を愛し、物質的に精妙華麗なものとの生来的同化と所有権を主張するようなこの秀才少年は、当代のエリート達に共通な、あの用語及び精選措辞の伊達風を養ってもいた」という描写に伺えるが、具体的な人物としての印象は薄くむしろマリウスの成長の一精神過程の解説者としての役割を果たしているようである。彼のもとで「日々の生活の層が無きに等しいが如く、日々の生活の理想的詩的特性、即ち優れた諸要素を極立たせる術」が獲得され、この意識的追求が倉の中での所謂『黄金の書』の読書となるが、「(割れ目を洩れくる)日の光が、涼しい褐色の影の中の粗い穀粒を金塊に変え」という象徴的表現にみれるこの書の魅力がマリウス自身のエピキュリアンとしての変身

を伝えることになる。ただ注目すべきは、この二人の陶酔が、マリウスにとっては、より精神的な価値を持つことに彼の生涯を通じての気質の特性が伺えるのである。

The human body in its beauty, as the highest potency of all the beauty of material objects, seemed to him just then to be matter no longer, but, having taken celestial fire, to assert itself as indeed the true, though visible, soul or spirit in things.

肉体の美も物体の美も究極的には「物に存在する真の魂」の顕現だという自覚にマリウスの知的精神性が説明される。更に Flavian の追求する Euphuism もマリウスが参加することにより、文芸活動そのものが宗教性を帯びてくる。

「その新しい精神の洗練過程や、冒瀆への恐怖や、外なる形式の正しさへの潔癖感の中には、今も尚彼に残る古い祭式への関心に資する何かがあった、あたかもここに母国語へのある種の聖務が含まれているかのように」ということから宗教的使命といった特性が伺えるのである。

このような態度の集約として Flavian の(ひいては Pater 自身の)文学理論が提示される。彼等には所謂伝統の重味が現前しており、反面個性の知覚力があって創作が生まれることになる。「あの重い権威、芸術・思想・宗教・聡明な政治形態の総体としての生きた統一した有機体たる完成した現実としての古い異教文化」と理解するものが伝統の重味であり、「ある強い个性的直覚、そうではなくて実際はこうだという事物へのヴィジョンないしは把握力、芸術的文芸的能力が、内なる基範を覆う蠟ないしは粘土の精確さで従うことを要請される直覚」と敷衍されるのが個人の想像力でこれに「文芸的良心的真摯」が伴って真の euphuism が生まれるという厳しい理論で、T. S. Eliot が「伝統と個人の才能」の中で構成した枠組に比すべきものである。更に Homer を論じて、作者を読者と自己の体験との仲介者と規定し「練金の筆触の機会」を

持つ錬金術師と比喻するところは、エリオットの詩人触媒説の祖ともいべき論である。以上の立場からマリウスが学習したものは、厳しい文芸一般に通じる *euphuism* であって、文学活動をして精神の練磨と発達に資するものとしたのである。換言すれば生涯の一つの倫理的過程を体験したことになり、この場合 *Flavian* が樹立した原理、「自分自身に関心をもつ時を知ることが、他人の関心をひく第一条件である」が基底にあることは、幼時からマリウスの根本原理であった自己中心的基準の流れが連続していることを示すものである。このような学習を終えた時 *Flavian* の役目は終了するのであり、従って彼は流行の熱病で病死しマリウスは新しい出発点に立つことになる。

最後にマリウスの尋ねる言葉、「僕が度々君のことを泣きにきたら慰めとなるか」及びその答、「僕自身気がついて君が泣くのが聞けなければ駄目だ」の不自然性を *Benson* は指摘するが<sup>(15)</sup>、これはマリウス自身の不条理への反応とみるべきで、本来的には *Flavian* への慰めではないこと、*Flavian* 自身の出生及び忍耐強さから来る我の強さの表われであることを知れば、幼時の動物への共感憐憫の知的情的に発達した形と受けとれよう。「異教の最期」の章は、*Monsman* によれば「二世紀の古代世界に伝播する全国的譫妄の徴候<sup>(16)</sup>」というが（その根拠づけも首肯できるが）、むしろマリウスの異教的情調（特に死に対する）の終末ととれるのではないか。死の狂暴の前で人間の屈辱を凝視して感ずる次のような反抗の怒りは、幼時の異教的宗教感覚に知的要素が加味された究極の姿であって、「異教の最期」は *Flavian* の死にからまる精神的区切りを語るものと言えよう。それは象徴的感情である。

A feeling of outrage, of resentment against nature itself, mingled with an agony of pity, as he noted on the now placid features a certain look of humility, almost abject, like the expression of a

smitten child or animal, as of one, fallen at last, after bewildering struggle, wholly under the power of a merciless adversary. Part II (1) Heracliteanism から New Cyrenaicism へ

*Flavian* の死が靈魂の消滅と感ぜられ、*Hadrian* の死後の旅という考えにも納得できず、マリウスは被造物に関する哲学諸派の研究に進むがプラトンの霊肉分離の概念にも満足せず、友人の肉体の消滅が彼を信者気質をもつ唯物論者に変えてしまう。死とともに消える「奇妙な謎の個性の本質」について知ろうとして *Heraclitus* に向うと述べてペイターは主人公を忘れてこの哲学者の説を開陳する。事物の永遠性固定性は印象の誤認であって真実は万物は永遠に変化しそれが「精妙で遍在する流動——自らの律動性に応じて進み精神と物体に生命を与える、不眠の永へに維持される消耗のない神性の理性の原動力」を指標するものとの概念である。しかし後半の肯定的説は受容されず「流動の説」が真の認識の不可能を唱える段階でとどまり、従って個人の瞬間的感知を万物の尺度とするという *Protagoras* の説と変らぬものとなっていた。マリウスも「一つの遍在生命」は立証されぬ仮説としかみず、自己の尺度と他人の認識の相違を *irony* と考え「人間の生の状況の中で、この第一義的不確実ないし否定性の要素を適度に認めぬ行動の理論」を拒絶し、*Aristippus* の判断停止と提携することになる。このようにしてマリウスの感性の発達が知的根拠を固めるのだが、この場合個人の遍歴の形成経過が人間の歴史一般と結合していくことにペイターの意図もあったようである。

*Aristippus* に於ては、すべてが虚無だという論がギリシア的活気の気質を伴って実用化され「人間の危機への注意の要請」という印象を起し「経験を求める永えのあくなき渴望」を刺激するが、マリウスも、今終ったばかりの過去と未だ来ぬ将来の間の現在点のみが存在するという意識が実践化されて「悔恨と欲望を排除し、

絶対的公正の精神で現在の改善に身を委す決意」を生み、「快樂ではなく生の総合的完成が実践的理想だった」わけで、その補助力となるものが明察力 (Insight) となる。明察力とは、いわば鏡のような魂の自由であり、偏向的教説からも、過去への悔恨や将来への欲望からも解放されたものであり、「生のための生」の哲学は、「内的外的直覚をするすべての器機の洗練と、その能力の開発及び自己の吟味と練磨をして、世界における現実体験のヴィジョン (至福の視察) に対して自己の本性を一つの完全な受容の媒介者たらしめる」という実践的生活原理となり、マリウスの場合 Cyrenaicism は単なる快樂主義とは異った宗教的生活信条のようなものとして生の完全性への志向をはらんでいる。従って用語は異っても、Heracles のいう「神的理性の活力」への志向を持っていることは否めない。明察力による運動としての姿勢に肯定的意志が顯示されているのである。

「新キレネ主義」の章は、以上の信条の確認で、教養の教訓ともいべき「此処に今在るものに関して完全であれ」との倫理から、手段が目的を正当化すると論理を以て、所謂「審美的教育」一人間の限界を確認する消極的な面と、受容能力の拡大洗練という肯定面をもつ「広範で完全な教育」( *paideia* ) を要求することになる。この教育では想像力の産物たる芸術が、生の完全な形態を提示しそれが感動的瞑想の対象となるわけで、信仰や希望と無関係に瞑想の対象の意味での幸福感で、此処・今の点で日々を「美しく楽しく」生きるということは宗教的畏敬の感覚すら保持する生活原理で、所謂快樂主義 (hedonism) とは異なるものである。「ヴィジョンの本質的至福性に根拠をおく瞑想的生活の新しい形」として実現されるこの審美的教養の生活では実践的行動律として生活が日々美事な演奏の曲に似たものとなり、万物流転は一種の律動と調和に一致するものとなるわけである。生の充実を求めるマリウスの「新キレネ主義」は、アプデュレイウスの愛の物語を含めて「英雄的感

動的・理想的なあらゆる人間生活の形態」を批評基準とし、「汝の手が見出すものすべては全力をもって行え」というストア派の原則とも一致が見出だされ、「単なる生や生得的才能や力への偶像的崇拜」への誤った方向をとる傾向を持つものとペイターは注記する。何れにしても幼時の女性 (母性) 的感覚の涵養から、男性 (父性) 的知性 (乾いた光) への巡礼的成長がみられ、この過程でマリウスは、解説者及び批評家としてのソフィスト (修辞学者) の職を希いローマに研究に行こうとする時、Aurelius の書記として召喚されることになる。

## (2) 新しい道 (キリスト教) への誘い

「途中で」の章は、マリウスの生涯の旅における過程で一つの新しい方向 (生の完成のための) を模索しながら、暗示的場面の中で自分の心の投影を見出だす象徴的な章である。Ward は「この旅は、先ず現実性と理想性ないし男性的なものとの女性的なものとの間を揺れ動く精神状態を説明し、次いでそのとりとめぬ思いと俊巡行為を体系的形式に変える<sup>(17)</sup>」と述べているが、むしろこの精神状態は一貫した主人公にも自覚されぬ志向性を持っていて、それが「連帯 (companionship)」の語となって表わされているようだ。先ず徒歩での旅に子供がマリウスの手をとって「信頼しきって (with entire confidence)」 「彼と一語に在る嬉しさばかりに (for the mere pleasure of his company)」 途中迄ついて来る。ルカの町では休息と愛想よさを示す事物の外観に彼は歓迎感を感じる。次の光景に暗示されるものは身体を寄せ合う動物の心象、相互依存と安息の象徴としての「家の精神」の町への拡大であって、小さな社会の連帯的安息感が伺える。

Under the deepening twilight, the rough-tiled roofs seem to huddle together side by side, like one continuous shelter over the whole township, spread low and broad above the snug sleeping-rooms within; and the place one sees for the first



time, and must tarry in but for a night, breathes the very spirit of home. The cottagers lingered at their doors for a few minutes as the shadows grew larger, and went to rest early;

もう一つの印象的光景は、タイパー河を渡った後の陽性の解放感を伴う状況である。豊かな自然と人間の解放された環境との調和感が絵画的手法で描出され、一瞬マリウスは、ギリシャ神話を生み出した初期の無自覚な詩人のような気持となる。彼には感覚的材料の反映として望ましい哲学的パタンが存在するのであり、芸術家気質がこの光景の意義を覚知するのである。

Nature, under the richer sky, seemed readier and more affluent, and man fitter to the conditions around him: even in people hard at work there appeared to be a less burdensome sense of the mere business of life. How dreamily the women were passing up through the broad light and shadow of the steep streets with the great water-pots resting on their heads, like women of Caryæ, set free from slavery in old Greek temples. With what a fresh, primeval poetry was daily existence here impressed—all the details of the threshing-floor and the vineyard; the common farm-life even; the great bakers' fires aglow upon the road in the evening.

生活への安住・東博からの解放・詩的充足感等が、この光景の象徴するもので、これが後に皇帝のストイシズムを避けて Cornelius の快活な厳しさへ向かわせるマリウスの気質を暗示しており、彼との連帯感への導入となっている。

ところが、こういった彼の志向に反するものとして七日目の晩の疲労感に襲いかかる落石事件が起こる。「生の最上の楽しみも、いわば暗い包囲する悪の力を人が一瞬忘れたときに大急ぎで、もぎとられてしまう」という感情が、自分の哲学が「単なる肉体への悪の恐れも峻厳な運

命も貧欲な黄泉の河の騒音」も克服していない思いを引き起こすが、ローマの宿で甘美な部屋、最良の油の火の光、花瓶のカーネーション、風味も色も満点の白葡萄酒がこの事件の憂うつを救ってくれた時 Cornelius の声が出て彼を回復させる。このことから落石事件もローマの宿での安息も Cornelius の体現する生活信条としてのキリスト教の機能を強調するペイターの伏線だったことがわかる。旅路での荒地的狀況の不快さが反って二人の友情を深めるが、この騎士の快活さと融和する峻厳さを知り騎士の盛装をして立った時、マリウスが「今、世界にやって来つつある新しい騎士精神に始めて面と向かいあった気がした」のは、Monsman のいう悪魔の奸計に立ちむかうパウロの戦士の権化の役目があるからである。(18)エペソ書の「悪の日にもちこたえられる様……神のよろいを着けよ」というキリスト教への導入者として彼は現われ二人は「諸にローマへ到るのである。

### (3) Stoicism

ローマは没落の前夜ともいべき異教世界の詩と芸術の最頂点に達しており、多数の土着及び外来の神々の祭儀が迷信を含めて認容された「最も宗教的な市」となっていたが、その政治的宗教的首長たる Aurelius が一つの生活信条の代表としてマリウスに接することになる。Aurelius は、宗教と哲学との古来の対立の融和の体現者として、最も熱烈な哲学者と最も敬虔な多神論者とを兼備し、ストア派のいう世界に流散して生命を与える唯一の秩序精神(one orderly spirit) を承認し、それへの精神的類似を求める不断の努力をしながら、多数の在来及び外来の神々への信仰を表わしている。(ペイターは、これを唯一神に聖者崇拜を加えたカトリック教会のやり方と解している。)彼の信仰は民衆感情への譲歩とか同胞感の結果というのみならず、他人はすべて神的理性 (Divine Reason) の管理の手段という哲学的認識に立ち、彼の哲学は「精神的方向づけ」の力を涵養するという宗教的性格を帯びている。彼の信条

とする Stoicism は彼自身の講演の様子にも表われ「生きているローマそのものの碑銘」を作ることのような幻滅の熱情にとりつかれていた。

マリウスの Cyrenaicism は「自分の内外の世界は川のように流れ去る」から「此処に今在るものを最高に利用しよう」とし、Aurelius の Stoicism は「世界とそれを考える者は焔のように燃えつきる」から「虚無から目をそらし身を棄てあらゆる愛情から身を退こう」とする。出発点の観察は同じであるが帰結が 180 度の相違となるという点で、マリウスの精神遍歴は、自分とは対蹠的な生活原理に直面したのである。

「人間の競争も木の葉の競争の如きもの——秋風が大地に枯葉をまき散らせば、春は森林に若葉を授ける」という Homer の詩行を引用して Aurelius は生命の卑小性を説き、「運命のクロトの車に身を任せ彼女の紡ぐまゝの布となれ」と勧め、将来への欲望の空しさに言及する。

All but at this present that future is, in which nature, who disposeth all things in order, will transform whatsoever thou now seest, fashioning from its turn, lest the world grow old. We are such stuff as dreams are made of—disturbing dreams. Awake, then! and see thy dream as it is, in comparison with that erewhile it seemed to thee.

すべては虚無であり「無情な風に吹かれる砂だまり」に過ぎぬから、死を自然の機能や効果とのみならず利益と考え、行為の停止にも死にも悪のないことを知り、船の旅に出て他の生、即ち忘却の中へ入れと勧める。そうすれば「少くともお前を感覚的にたたきつけるものや、心ない玩具の如くお前をそこここに引きずり行く情熱や、知性の長い行進や、わずらわしい肉体への務めから休息を得るであろう」というのである。生も死も与えるのは自然で、人間は俳優で自然が指揮者なのだから、5幕の役か3幕の役かを決めるのは自然だから「善意を以て退場せよ、お前の役をおろす者も又おそらく善意ある

ものかもしれないから」と講演を閉じる。

Benson は、これを『瞑想録』の金言の綴り合せで、この作中の欠点とみており<sup>(19)</sup>、Monsman は道徳行為に関する肯定的章句を除外したために『瞑想録』よりも絶望と放棄の色が強いと述べている。<sup>(20)</sup>これがマリウスの生活倫理と対照的なのは、初めから生への参加を拒否し生の意義を死の準備過程とみて、人間を単なる外在者に動かされる傀儡とみていることである。Aurelius 自身においては神的理性との関連をもつ信条であろうが、その解説は省略されている故、現地の苦悩者への慰安とはなっても、積極的生活原理としての知的説得力に欠ける感覚的把握といえる。象徴的手法として風景をとりあげるペイターの常として、この講演の終了とともに暗闇と大雪による冬の到来と、動物達の窮乏による野性の発揮を描写して、マリウスのこのストア派の論への反撥を暗示している。

一方皇帝の民衆及び弟に対する同胞愛や、師 Fronto に対する尊敬と師弟愛、家族との交流、マリウス自身への親密性等好ましい挿話も折り込まれるが、弟 Lucius Verus と娘の祝婚のための、罪人を含めた動物達の殺戮ショーへの皇帝の臨席の際にみせた無関心 (indifference) と無感覚性 (impassability) の故に、マリウスは、「初見で知る決定的良心」の欠如を彼に見て自分との相容れぬ相違を自覚する。肉体の目の信奉者のマリウスには「生の危機」が分り、周囲の現実の善悪の激しい対立を混同したり妥協させたりは出来ず、当初は犠牲の儀式として神々との接触をもった動物達の殺戮が「男の娯楽」と墮し、それを黙認する Aurelius を認容できないのである。第一巻を閉じる次の言葉が、Cyrenaic としての宣言でもあり、Stoic である Aurelius への批判であることは意義あることである。

His chosen philosophy had said,—Trust the eye : Strive to be right always in regard to the concrete experience: Beware

of falsifying your impressions. And its sanction had at least been effective here, in protesting—“ This, and this, is what you may not look upon!”— Surely evil was a real thing, and the wise man wanting in the sense of it, where, not to have been, by instinctive election, on the right side, was to have failed in life.

印象への信頼と「本能的選抜」による正義の側につくことの信念が培われていたのである。

### Part III (1) 新ローマ

平安寺院での Fronto の講演は、円形劇場でのショックから自身の知的計画（道徳廃棄論の色彩をもつ）と古来の道徳との調整の可能性を焦燥する道徳的状况にあるマリウスには、個人的教訓の感があり、彼の生活原理への弁証法的反省を与える機会となった。かつて Fronto を、生来の青春の美質を等価な優雅な教養に代置した、完全に良い、完全に美しい老年と見て、その静穏な快活さを自己の必死の様子と対比させたマリウスに、今彼の他人に対する審判の優しい親切心と慈愛心と精妙な良心とが感ぜられ、「本能的に、たゞ有情なれば正しさあり、と審判する」人として、自己のアンチ・テーゼとして承認するのである。

Fronto は、道徳行為が「慣習への完全な習慣的無意識的賛同」に負う意義を評価し、「完成した正しい人間達のすぐれた親交にいわば体現される、精神の世界的共和国」としての人類の観念 (the idea of Humanity) を解説し、其処での慣習は、「その中の可視又は不可視の貴族社会の創設するもので、その現実の風習や古来からの好みは、今や、なすべきこと・なさざるべきことに関する重大な伝統となり、生活交渉の向う音楽—一度そのハーモニーを捕えれば、すすんで誰も乱そうとしない音楽のようなものとなる」という道徳原理を開陳する。「人類・世界的社会・大国家・選ばれた人々の貴族社会・後継者への彼等の範例の支配」という観念で「人間の道徳的努力を高揚させ一原理に統一する」と

いうのである。マリウスには、これが知的抽象概念に過ぎぬとの疑問は残るものの、反省の機縁は与えられたのである。

「再考」の章では、Cyrenaicism が青春に特有の哲学で「経験の一面の真理の、限定された為に生彩な理解に基づく主観的部分的理想」の一つに過ぎぬという反省が行われ、「その生の概念の重大さ、完成への追求、時間の価値の把握の点で、Cyrenaicism は趣旨については、古い道徳に対立するというよりも、その一つの特別の動機の誇張である」と考え、その排他性・消極性の矯正は、自らを含む大きな体制からの補足的感化によると悟るのである。マリウス自身の場合、周囲の目に見える美しいものの外面、いわば事物の審美的性格への専一な確執にとられ慣例よりの完全な個人的な知情からの自由を主張したが、彼の外には「時空に広がる人間生活の完璧な財産としての感情と観念の尊重すべき体制」があり、その権威は古典趣味のそれのようなものでその慣行は「自発的機械的ではあっても、よく考えれば妥当な意義と自然の歴史を持っていることがわかる」のだから、譲歩をしなければ首尾一貫せぬエピキュリアンになると自省する。そこには Fronto の倫理観への屈服とはいわぬ迄も譲歩がみられ、マリウスの生活原理が一つの対立物と接することで止揚されジンテーゼが生まれるという弁証法的精神展開をみることになったのである。

「祝福された都市」の章は、Fronto の倫理観の典拠となった Aurelius のヴィジョンの解説となる。疫病死した Lucius Verus の神格化の後に戦争資金調達のため財宝を競売に出した Aurelius が解放感を感じ瞑想にふけっている日に、マリウスが一年目に呼び出され彼の瞑想の原稿を渡されるが Aurelius の顔には平安と静かな喜びの表情が読みとれるのである。

Aurelius の瞑想の中には、現実の諸都市を包含した自然の合理的組織に連繋する「高所の都市」の観念があり、「その組織への敬虔な瞑想によって人間は神の意識と連帯できる」と考えそ

の「新しいローマ」(ヴィジョンの中での)にこそ安住できるとしている。プラトンの章句を読み「外の世界には混沌しかないので、彼の中にはかの驚異の理性的組織たる宇宙 (Cosmos) が在り得るのか」という疑問から、「神意の意識が到る処で実現され、下界の可視世界との恵まれた相違として、人や子や愛するものの絶望的な死のない目に見えぬ祝福の市 (Celestial City)」「自然の中にはなく人事の状況の中の理性的神的組織」のヴィジョンに思いを致すが実際には空虚な場所としてしか出現させ得ぬ Aurelius の姿が語られる。これは又マリウス自身の省察でもあり Fronto に感じた不満がそのまま Aurelius への不満となるが、同時に彼の心のいわば宗教的同胞意識ないしは連帯感の萌芽ともいうべきもので、やがてキリスト教への軌跡に移る伏線と考えるべきであろう。

## (2) Marcus Aurelius の分析と批判

皇帝に託された原稿からマリウスは、Aurelius の①悪の黙認②肉体排斥③感情感溺の三点を分析批判するのが「矢投げの儀式」の章の主眼である。自己との対話を必須とする皇帝にマリウス自身との類似を見出し、「完全に外的客観的な生活習慣に不満で」「外及び内から生ずる全経験を利用しようとする欲望」で永遠の流動に対処する魂を評価した上で、次の様な考察をする。

「吾々の現実の思想感情を意識し、人の自己の気質に満足したり不満を示す他の誰かが居なければ、このような自己との内的対話はあり得まい」とする観点から公的宗教儀式を執行する皇帝は「ある大なる過程」に参加しているのであり、彼の原稿は「己が正しい自我ともいうべきあの永遠の理性、人の知性に宿を借りる神的伴侶との融通の記録」となっている。彼の場合、自然と人間に共通で時空に遍在して万事を秩序だてるものは、偶然か神意(又は叡智)かとの二律背反は意志の問題として「意のままに考えるは汝の手中にあり」、「見出し得べくは、二者の内、良きに心を向け、眼前の最良のもの

を飲食せよ」との立場から、この神的伴侶(予想される客)への客問の甘美と静穏を維持することが急務となり、僧侶の魂で自己凝視をすることになる。「何にもまして己れ自身を験べよ、己れ自身を熟知すべく努めよ」という自己指導は、異教世界を超えてキリスト教会下の人間精神の形成に一役買うものであるが、彼の場合、無為の罪業の性格に近い憂うつ、「暗い自己放棄」を生み出し、「現実に対立するロゴスの神的範型ないし永遠の理性への、現実世界の調停」が無くして悪の許容が生じ、かつてのショーでの無関心のような状態が生じるのである。彼の悪の許容過程(論理)の一例が次の章句である。

- ① The soul of good, though it moveth upon a hay thou canst but little understand, yet prospereth on the journey:
- ② If thou sufferest nothing contrary to nature, there can be nought of evil with thee therein:
- ③ If thou hast done aught in harmony with that reason in which men are communicant with the gods, there also can be nothing of evil with thee—nothing to be afraid of:
- ④ Whatever is, is right; as from the hand of one dispensing to every man according to his desert:
- ⑤ If reason fulfil its part in things, what more dost thou require?
- ⑥ Dost thou take it ill that thy stature is but of four cubits?
- ⑦ That which happeneth to each of us is for the profit of the whole:
- ⑧ The profit of the whole,—that was sufficient!

①は大前提で②③は仮説としての前提で④は結論としての現状肯定である。これは、神的理性側からの判断であるが、人間行動の側からすれば、⑤⑥は自己の現状の認定承服であり、⑦⑧はその論據となる。従ってこの論理は客観的と

いうよりは信仰的であって「無理で容易な楽観性」がみられ快活性を欠いている。この点では *Cornelius* には「事実としての悪の承認」はあるが「死から救われたものの静穏、永続的快活性」がみられると、マリウスのキリスト教への傾斜を伏線として提示している。

次に皇帝の立場からは、「感覚も情熱も自己に侵入するを許さず、己が内を活動し、肉体的印象に耐えることが理性固有の特権」であり、「精神の関心は、肉体を生きた伴侶というより己に付属する死体として取り扱い、肉体の溶解を促進することである。」という肉体蔑視が生じる。マリウスはこれにも反対で「自然への罪」と考え、肉体を「一つの真の寺院」として信仰の対象とする *Cornelius* に軍配をあげるが、この点にも彼のエピキュリアンの性癖との一致と、更にキリスト教志向の暗示がみられる。

最後に、以上のような非人間性や禁欲的無関心にも拘らず、「不幸及び他人の弱さに我を忘れる人」としての皇帝の傾斜が語られる。原稿の中のみならず、死んだ我が子を抱いた悲しみと敗北の表情は、「あたかもたゞ一つのこと、さだかならぬ苦しみにいる我が子と結ばれ完全に一体となりたいかのようで、」思わず洩らされる皇帝の人間の側面が、他の思考と対照的ただけに深くマリウスに印象づけられて *Aurelius* の批判への一つの償いとなっている。

### (3) 啓示的体験からの大理念 (Great Ideal)

第3部最後の章「意志はヴィジョン」は、アンチテーゼとしての *Fronto* 及び *Aurelius* がマリウスに止揚の機会を与え、彼が総合の過程で感化された事を示す章である。「意志自体が、認識しないヴィジョンの器官なのか」という疑問に、おおむね肯定的な答がマリウスの啓示的体験から引き出されることになる。

啓示的場面の設定は、ペイター特有の心象風景に象徴的暗示性を持たせる手法に基づいている。純潔で薄い空気、ヴェールのような白雲、時間を感じさせる古い寺院、シビルの神社の柱円、古い岩と調和した家々等がこの場の自然の

荒々しさ（川の流れや懸崖）と一部は調和し一部は抗っているような様子及び太古を思わせる常緑樹（「生と死の結び合さった力で侵され歪められたありとあらゆる気まぐれな形」という表現は同時にマリウスの精神形成過程への暗示があるかもしれない）等の「この地の外観」が啓示に作用を及ぼすのである。「あたかも自然の生命の霊が、緩い賢い成熟の仕事をして、大慌ての啓示をひかえているかのようだ」という表現に反ってマリウスの精神的成熟が予想され、このオリーブの庭で彼は現在迄の生活が他の世界に入るような夢の中で啓示的な感謝の歓喜を体験するのである。

Through a dreamy land he could see himself moving, as if in another life, and like another person, through all his fortunes and misfortunes, passing from point to point, weeping, delighted, escaping from various dangers. That prospect brought him, first of all, an impulse of lively gratitude: it was as if he must look round for some one else to share his joy with : for some one to whom he might tell the thing, for his own relief.

この伴侶への欲求が「路傍の薔薇の楽しみを増し、自分の気むづかしさや消沈を忍耐し、就中幼時から此方の、自分がここにいるという事実への感謝の承認に共鳴してくれる、たえず自分の傍にいる信頼できる伴侶 (unfailing companion)」に思いを致させ、更に、旧約聖書での創造主、ギリシア人の永遠の理性、新約聖書での人の父にあたり、プラトン、*Aurelius* にも見られる「万物に作用する生きた伴侶たる霊」を推測させることになる。

啓示の瞬間に肉体構造が外的物質的力の体系に規定された如く、知的構造も、全時空に遍在する外的な知的精神的体系の一過程ではないかとの疑問が、彼にプラトンの理念の世界と、アリストテレスの創造的不朽の知的精神の仮設を受容させ、「天上の新ローマ」への眺望を開かれ

た感を持ち、「神的伴侶は傍の一時的旅人ではなく、彼の肉体感覚に動機を与え、その靈感と協力的な呼吸することも見ることも出来ないような信頼できる援助者と考えられ」快活な感謝の意識を喚起してくれることを確認する。これは完全に *Fronto* と *Aurelius* の帰結と一致するもので自己の体験から納得せざるを得ぬものとなる。「生涯の残りは、所謂現実の物、自分の現実体験が提示するかの理念のあらゆる跡やしるしの集合の中での、その理念の相等物への探究に過ぎぬのではないか」という疑問で第三部が終るのは、この次元での自己の確認と、次の段階への精神的飛躍への期待を予想させる精神歷程としてのこの物語の性格を更めて承認させるものである。

#### Part IV (1) 夢からヴィジョンへの萌芽

第三部の体験後、*Apuleius* を主客とする席に同席したマリウスは現実世界が現実性の少ないものとなった自己を発見する。「客人達」の章のエピグラフが「老人は夢を夢みむ」とあり、「セシリアの家の教会」の章のそれが、これに続けて「青年はヴィジョンを見む」とあることから両章は、過去志向と未来志向の対照が夢とヴィジョンに託されているといえよう。夢の方は宴席で語られる変身賦と主客の信奉する仲介者の説である。妻からかわせみへの変身の可能性を尋ねられたソクラテスが、人間は可能・不可能については、未熟さや精神の幼児性から、半盲の審判しか出来ないが「我等と比すには大きすぎる力を持つ神に、その種の過程は容易に統御できるのではないか」と答えた話が語られるが神の偉大性の承認を暗示する挿話である。又、霊ある者には神と人の二種類があって、両者の間に中間的神的有力者があり神と人の間で両者の憧憬を伝達し、祈願・懇願及び賜物・援助を運び「彼等によって啓示・奇蹟・魔術的過程が生み出される」という *Apuleius* の説は、目で見る物に頼るマリウスには仮説として寂寥を感じさせるが、世界の事実・真実に対する人間気質及び見解の多様性を示すものとの反省を得

る。しかしこの二つの夢は、神の超越力及び仲介者の介在の承認という点で、単に次の章のキリスト教と対比されるべきではなく、それへの精神的準備過程である筈だが、ベイターはこの事を顧慮していないかのようなのである。

キリスト教への導入者としての *Cornelius* によって案内されたセシリアの家での体験で、マリウスはもはや以前のまゝの自分ではあり得まいと悟っている。少年の讚美歌に「ある屈從的体験が英雄的に作用し、この温和な午後も尚大救済の時を想起している人の中の喜ばしい魂の快活な自己拡大」を感じ、部屋を巡りながら「恵み深い婚礼に備えるかの如き秩序と純潔、秩序を求める気風」を認め、埋葬墓地を死者達の町と見て復活の希望の批判は別として「無力な者を忘れ棄てることを騎士風に拒否することでマリウスにとって全ての自然の義務の中心的解釈者とも象徴とも思えた敬虔で統制のとれた死者への記念」を感じとったのである。最終的には次の三点を象徴的暗示的に体験する。一つは墓の奥の海を脱がれ生命からがら岸に歎極まってしがみついた像の次のような碑銘であるが、それは永遠の生を神に約束されていることへの信仰を如実に語るものである。

*I went down to the bottom of the mountains.  
The earth with her bars was about me for ever:*

*Yet hast Thou brought up my life from corruption!*

第二は夕映えを残す薄暮の邸内で聞く、夕べの希望と恐怖の権化ともいべき次の聖歌であって、光として扱えられた（智恵の意を含む）神への讚歌である。

“Hail! Heavenly Light, from his pure glory poured,  
Who is the Almighty Father, heavenly, blest:—

Worthiest art Thou, at all times to be sung

With undefiled tongue.”—

第三は女主人のピエタ像を想わせる子供を抱き子供を引いた姿である。これらはこのキリスト教の館の雰囲気代表するもので「古い生の謎を解決した事実の魅惑的発見に規定された」「希望ある勤勉、完全な清潔、共鳴する愛情」を暗示していて、窒息状態のローマとその生活の中でマリウスに「脱出の憧憬」を充足させてくれるものであり、「精神の病気」ともいべき体質的悲哀への慰藉ないし鎮痛作用があったのである。しかしこの場合彼のキリスト教理解が、「慈悲の意志が、ここでは、痛む肉体への柔かい手触りの如く、たゞこの空気に触れるだけで癒すべく顕在していた」という、いわば肉体的感覚であったことに注意すべきである。このあたりに Benson のいう「感覚的訴えと典礼の厳肅性により信仰の入口迄やってきた<sup>(21)</sup>」との批判の生じる所以があり、またそれをふまえて「ペイターはキリスト教信仰の本質を殆ど全く知らなかった<sup>(22)</sup>」と T. S. Eliot に云わしめたものがあるともいえるであろう。

## (2) 殉教の問題

「教会の小平和」の章でペイターが、この時代の基督教は「人間性を持ち人本主義的ですからあって、人間への惜しめない希望があり快活な奉仕の常識と敏速性を持ち、すべての被造物への共感と美と日光の理解を示すもの」と規定するのは、マリウスの共感を呼んだ性格を確認させるための様である。「祭式」の章で不図立会ったセンリアの家でのクリスマスの儀式に参集した人々の容貌に「あたかもある深い矯正、霊による肉体の再生が始まったかの如く」光輝、即ち快感・神秘的温雅・宗教的熱情等を認め、祭儀の構成や讃美歌に感動して、今後それに憧憬の記憶ないし渴望を経験すると感じ、「この儀式が、自分を世に送り出し不幸にさせぬ力から、それが何であれ、自分が何を求めねばならぬかを規定するように思えた」というマリウスは、基督教の感覚性に魅せられているのであって、教義的回宗の方向はたどっていないようである。

「実際の会話」の章では、マリウスは Lucian

と Herminius とのソクラテス的産婆術を適用した対話を傍観し、この章そのものの饒舌感 は免れぬが、哲学の絶対性を破壊し、相対的に各派の説を夢とし、一派に偏する過りを指摘する態度は、ペイター自身の相対主義的評価を示すものであり同時にエビキュリアンとしてのマリウスが一瞬毎の価値を尊重する態度の反映として意図されたのかも知れぬが、帰途のマリウスの心を占めるものは、精神的真実の道と、現実の道との連想にからまる十字架を負うキリスト像であって、路傍に気絶する愛とそれを支えに現われる大いなる力で旅する愛の解返というキリスト教伝説と、朝方の会話に出た真実の高みに到達した人について「高みから降りて下に居る者を助けてはくれぬのですか？」という疑問や「我等も美しいものではなく最も美しいものを望んでいます。その人を見つけないければ駄目だったと思うでしょう。」という姿勢は、対照的でありながら反響もあると感じることは、彼の心が「生ける者に涙あり」の章につながる憐憫の情を意識しているといえよう。

彼の心の記録の羅列が続く次章は、憐憫を催す事件が挿話的に提示され、結論として、現状という悲しみがあり、それに対抗するために「自己憐憫という人間の不変の力」が必要だとさるのである。知識が増して「人間の立場の根本的無力性が多く啓示される」ので人間の差異は、「人間の条件への洞察能力と同情能力」にあるとして次のような感想を洩らすのである。

In the mere clinging of human creatures to each other, nay! in one's own solitary self-pity, amid the effects even of what might appear irredeemable loss, I seem to touch the eternal. Something in that pitiful contact, something new and true, fact or apprehension of fact, is educed, which, on a review of all the perplexities of life, satisfies our moral sense, and removes that appearance of unkindness in the soul of things themselves, and assures us that not

everything has been in vain.

そして「人の思想の中の神的『援助者』に我等と同じ心があれば良いのに」と希うのである。このマリウスにみられるものは、単なる人間感情としての憐憫で基督教へ接近する準備段階としての感情の深化ないしは信仰志向ではないようである。

「殉教者達」の章は、リヨンとウィーンの教会からの書簡に記された殉教者達の迫害された状況の描写で、この章の意図は①主の言葉の成就をペイターが看過できなかったこと、②マリウスの所謂殉教との質的対照が故意にか無意識に顕在化したこと、にあるといえよう。殉教者達の信仰告白は使命感をささげ伝えるが、マリウスの場合単なる偶然のいたずらの要素が多い。たゞ創作的観点に立てば、以上三章と基督教の歴史を論じる章は、主人公マリウスが名はあれど不在同然で、小説の構成要素というよりむしろ第4部の長さを維持するために挿入された論文ないしは随想的要素の強いもので、マリウスの精神史からは離脱した傾向にあり、作者ペイターの計算の無い饒舌として評価され得るものではなからうか。

「マルクス・アウレリウスの勝利」の章は、マリウス自身の祖先の地への帰郷を述べるもので、死者達が彼を待ちわび彼の献身を感謝して受け入れてくれる期待が語られるが、死んだ父親との和解を含む死者達への心遣いには弱さがあり、その行為は自身のためだと悟り、己が碑銘は「此の人は一族の最後の者なり」という気がして更めて死者達を埋葬し直すのであった。この感情には気力体力の衰退が推測され、宗教的精神的探究の道が終りに近づいた感を抱かせるものがある。前章の生きている者の悲しみへの憐憫とこの章の死者への共感とで、一応マリウスの旅は感情的に異教的なふりだしの白夜の邸にもどったのである。あるいは始めに既に終りがあったのであり、今終りに一回転した円の始まりを迎えたのであって、その意味でも基督教という新しい生の原理への転向は考えられぬ

かもしれぬのである。

最終章は劇的行動の最も多い、そして加速度のかかった部分である。ペイターは彼の生涯を次のように要約する。

His own temper, his early theoretic scheme of things, would have pushed him on to movement and adventure. Actually, as circumstances had determined, all its movement had been inward; movement of observation only, or even of pure meditation; in part, perhaps, because throughout it had been something of a *meditatio mortis*, ever facing towards the act of final detachment. Death, however, as he reflected, must be for every one nothing less than the fifth or last of a drama, and, as such, was likely to have something of the stirring character of a *dénouement*. And, in fact, it was in form tragic enough that his end not long afterwards came to him

気質と知的論理の両面からのエピキュリアンであり、生涯を通じて死と対決して瞑想の生活をし、求道者的性格の人生の大団円に際し、友人 Cornelius を救い自らは疫病と疲労に倒れるが彼にとっては殉教は普通の死刑執行であって、「自分の血から奇蹟的詩的花は開くまいし、永遠の芳香が埋葬地を示すこともなく、訪れる者に永えに溢れる大恩恵を施すこともない」ことを自覚しており、死期に対して「自分の立場のような他人の死の床の傍で感じるような、費消された力の盲目的の蹂りんされた怒りの感情」を抱いている。そして彼の魂の受容力は最高となり「来るかもしれぬ客に備える家、神の指が書きに来るかもしれぬ白い滑らかな精神の刻板」を構成している。以上の特徴は明白にマリウスのエピキュリアンの態度であって、彼より高い彼に似た、肩に親しい手をかけるような影響力を期待しながら、生まれたまゝの新鮮な驚異を持ち事物の深遠な謎を来たるべきものの徴とし



て意識しながら死ぬのは必ずしも基督教の神への信仰とはいえない趣があり、殉教の使命感は伺がえない。勿論、Corneliusの期待にかける将来への希望と、彼の死を殉教と解する人の存在は、マリウスを基督教に帰順させようとの作者ペイターの意図が伺がえるが、それは彼の偏向であって意に反してエビキュリアンとして死を迎えた精神状況が描出されているのではあるまいか。

#### Notes

- (1) Benson, A. C., *Walter Pater, English Men of Letters* (London : Macmillan & Co., Ltd., 1906), pp. 89—90.
- (2) *Ibid.*, p. 90.
- (3) *Ibid.*, p. 110.
- (4) Eliot, T. S., *Arnold and Pater* (1930), *Selected Essays* (London : Faber & Faber Ltd., 1953), p. 440 ff.
- (5) Ward, Anthony, *Walter Pater : The Idea in Nature* (Worcester : MacGibbon & Kee Ltd., 1966) p.117.
- (6) *Ibid.*, p.174.
- (7) Monsman, G. Cornelius, *Pater's Portraits : Mythic Pattern in the Fiction of Walter Pater* (Baltimore : Johns Hopkins Press, 1967), p.66.
- (8) *Ibid.*, p. 97.
- (9) *Op. cit.*, p. 92.
- (10) *Op. cit.*, pp. 133—134.
- (11) *Op. cit.*, pp. 71—74.
- (12) *Ibid.*, p. 68.
- (13) *Op. cit.*, pp. 119—122.
- (14) *Ibid.*, p. 127.
- (15) *Op. cit.*, p. 97.
- (16) *Op. cit.*, p. 74 .
- (17) *Op. cit.*, p. 145.
- (18) *Op. cit.*, pp. 78—79.
- (19) *Op. cit.*, pp. 100 & 92.
- (20) *Op. cit.*, p. 79.
- (21) *Op. cit.*, p. 111.
- (22) *Op. cit.*, p. 441.

### Intellectual Journey in *Marius the Epicurean*

Mitsuaki HASEGAWA

*Marius the Epicurean* is an allegory of the intellectual journey through life by the protagonist. Pater writes of his object of the story that he intends to present 'a sort of religious phase possible for the modern mind.' A. C. Benson understands that Marius is a noble failure attempting to attain Christianity, with the result that he is just at the threshold of the Christian religion. Meanwhile T. S. Eliot criticizes that Pater knows nothing of Christianity. Anthony Ward illustrates *Marius* upon the basis of landscapes symbolic of his state of mind but says nothing whether his Christian faith and martyrdom are truly justified or not. G. Cornelius Monsman, on the basis of the analysis from the viewpoint of mythic pattern, concludes that Marius has attained Christianity.

The present writer, following the author's intention, traces the spiritual and intellectual development of Marius in accordance with the process of the story, and concludes that the Epicurean standpoint prevails in his history though he develops intellectually by the contact with various philosophical principles, and that even at the moment of his death he seems to remain an Epicurean in his temperament and response to death though some atmosphere of the Christian conversion is, it seems, intended to float abroad by the author.